



學大稻早圖
館書
庫文田內者托寄
號00一第書托寄
號18第
冊1第

□9
3521
1

3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3

天保乙未新刊

賤女鳴官遺草

本館藏板

尾行注。海生先生之手稿。因海昌
字也。刻以存。故用國字。先生
固。因。子。卒。索。寂。余。年。少。以。執。貨。
於。大。之。之。丹。子。而。先。生。出。升。之。契。弓。
素。因。系。忘。时。事。性。多。之。所。之。之。
而。多。之。校。之。多。之。森。事。在。四。十。

内田

9
3521
1

9
力遼1
門虎卷
2933
1-6

餘事。以此而少係輕重。苟同
及考。猶其言而實汝切易過。
岐。人殊彼行。資生日用。不啻如
布。尔。殊。蒙。而。主。写。性。亦。有。不
积。亦。因。信。也。乞。往。爭。併。人。不
捨。捨。煥。呴。吁。呼。也。而。不。返。老。華。

也。老者。逝。而。少。者。多。唯。古。文
者。多。廢。滅。可。母。克。刻。而。傳。之。
固。至。有。乃。弁。之。產。言。

天。体。已。來。花。經。矣。三。日。朴。房。





天保十二年九月廿日
内田糸子氏贈
山本六輔之



大正七年九月廿日寄
内田糸子氏贈



嚙鳴館遺草目錄

卷之一

野芥 上中下

卷之二

上ハ民の表

政の大體

卷之三

教學

農官の心得

卷之四

對人之問忠

建學大意

卷之五

管子牧民國字解

目金

卷之五

花木の花

卷之六

花木の花

附錄

與梓世儀手簡

對某侯問書

嚙鳴館遺草目錄

嚙鳴館遺草卷第一

序

むづく賤の男をまうぢ事とつてたゞへられた
まじるくうかぎてかくふそんくとすらも
このある人のあつてふがたてたゞへぐれ
いとあふまくはまうぢううひ一まもあら
たうよつてたてまうぢ事とまくへされ
ちよりうちうひの数とこれへくわさあらう
そもそもまますもくへだともあすすやな

ある所より其をうけとまつておもひてすま
きる所より其をうけとまつておもひてすま
そうとつされて書きしたまつたもの也

大意

節儉の政事済むの全般とゆゑは家格卑微
ええりりよくねくに及んでやうと底固り
私財の推定とてやうとあくまで底固り保
手車方行なほのかか取組へた道へまく底
とくに此一冊一途よろ理せとやうとあくまで

文多きを多くまし入らぬを後悔仕てん玉手と
モトニシキをあらわすはと放々とてくす
お徳ヤト日用口省略の細密よみうりてまく
精能の四役へたく肺お徳と底底よみうりと
慈とお徳アリ

聖芥上

根本三個條

○ふの戦用のち地と民力とのよりと根本うて
生ハトかよ出るふべを以てち地の大小民力の

多少にて販用の生ずるも限有べからず
あよ販用と用る法とへと景うり出と制すたゞ
入とく年内出来る物成とヤハ生とくまとつひ
出すとくとヤハ入するものとくとてきひ出す
高とくとくとくかよ販用の縁とへとくとてき
出とく

○入と景うり出とくと制すと古來より定うたる法
とくとくと家ふの費用りうと定の通うみへ不
參とくと不従と販用不とくとくと古従の政
が勅うて格別よあへと減へれがふ販用と医

○法とくとくと元と定法とくとれりとくとくと
販用不とくとお成れよりと定法の政とくとくと
立とくと立と立と立と立と服考の法と用とくと
方と減へえへ立と立と立と立と立と立と立と
法と用とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
事とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
臣民のとくと戴きとくとくとくとくとくとくと
然とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

何よりの御事のうけたるにあへ海へ是にて
行をかゝつて地をとむと是へまよ海へはる
やこのまちまつてもはるやそのまほのまをと
極みよ者をすと御事の法とへり人より
「ふ臣民よもと戴きをさうり侍多よ天の
めくの山神のまことの法と目せ度せる
若よりれおみくじをもたらす侍徳をあらわ
を御事の上吉今人名の質と學と磨然くる
城よとくね天のやまき侍徳とすり天のあわの
文母とて元老院のすらすとあらゆるをもる

天の恵としけ後とぬあへまくトまのまへ一ふ
万民のまとすとすと天のらとひらとて
臣民の文母とすりぬまぬとおへぬるのまと
夫人の文母とすりぬまぬとおへぬる
等とおほよなうとお身の飢渴るが若とすり
まくす能ふの飢渴るが若とお身を逃げり
人のまほとすりぬるがとくものよすと一國臣
民とすとふらはすとひづりのまぬあらまぬ若
ひづりぬるがとくものよすとおへぬるがと
まくす能ふの飢渴るが若とお身を逃げり

うへへは銀錠と額ちゆまきの仕方とたてしむ
て下よ財用をめたりあうとてらるる
まよまよ様子よは省略されまゐるからを
さうせがまくともおれりとてよりとてと
おれりとて思ふ立候列のに取れよ非をの
法をやアトシテ候の根本としておれ
○志へ一木の立候て戴くれりとておれ
タモいもうとて御安樂よしき生れりとて家中
より百姓町へよるるよして有事はなれど下候
生れりとてま畏るよりとも取り下のふかよ

わするときとおきねき和ちゆるとひ波をくわへた
一揆ふたたびてヤタウ一軍の掌記と曰うる
大おへ一軍のひ結軍みのよ是とてんりゆうひ
ぐくもゆきをばくとあくめうる大将ひ在ひて
たうりあうて原とてりとをかねとて大おへ
楯の後ようくかれ矢玉がちをまがりうと
うれすもと掌記とすりててアヘとすと
矢玉の多きをすもうちの下かよ及つす大お
必死よすりてちもせんよすくわゆへ一軍一同
ふや合たまへ先と手ひ矢もとれ一軍と

お事あらうからむよお集めらるゝからのかへたる
もより生れんに人ふのまえを身とみて民と
ひく方若とつらひゆえとは省略しあ
りては下るよ及く下の隸をほひ制度と
おちりよされ非をのこして目ともぞもす耳
ともせよれぬつきとまくゆゑよ人され感ら
きり思れ思りゆそひだらけをよほぬうるひま
りりやト組一まとても外の視徳と致ひ
とわくを思ひて清美の仁徳よりせやります
りと是又彼大おのまもんとす

必死のるも一敵のを脅かすり引ゆるもサモ
モシテ士卒も大将の繩ひとううひに
まうりと拂一トかよどても敵が多殺うるを
みやめに至るる所理よつてさりて非をの法と
ゆ立つら思ひとるよ上の清らと渾石のやゝ豈
意遊歩根拠す左す年くらぐく五年捨手と
ナハ僕約の取らうとまよアキタヌク

ち三ヶ条の節儉の政を根本とも此根本と固く
お仕りて枝葉を棄て道理を守る

枝葉四個條

○君上の御仁へ樹木の根本のやへ根本葉をすて
ゆるゝそれも枝葉の自然と繁榮はやうと及ヤル
僕約の政と立まつて人の財用とやうとすて
君上伟安乐と極むと雖たるよあす財用ゆくら
ちうの内に良きの爲めもやうきくと雖ば届かぬふ
先兵僕とを越えて財用の是うと爲めと云ひき
きりふとせんと見人云うの法仁傳としてされども
天道の法を云御先祖様への御孝めとすけ上

古威より民へ安すりやすをうすぬじふ生す
と育ててやへとのからとてひと仕事
自然より人へとを爲ねりとある人にを
ねりより無疑り一まゝア人の天とま作ぐるも
タレも后氏とふのやへと度よおとてうゑよ
おえすあ辭出張難と云ひりてうもよ僕約
をも言ひてと上まつてはすの家計へた皮の
御領の民百姓下りもけまとほへがうきうの
躋うとはやそのものけられへ思れつゝとくと
す自共と一身一家のくじしきともほぢりそ

お達はるゝかお風の氣の財用へお是よりとも縛
とておれよ相集へおとすより財用とてんくよ
おあはれは放へ不意様にともおのもうるよあ
もし事へ是つゆうたおれよておふまぬ是事
おれも自然とじつよ／＼事／＼おれよお集々
それとれちよも惠すよ／＼費／＼仰／＼仰／＼仰／＼仰
お家や経済へと上の所からとくとせりて下を
兵役ひり内へおのほ／＼急難とおつよはせて下の
ありとも寢懲ぢる／＼おなははり身下の忍とま
よのひるよ相集をさうるふ御法あるとも

す／＼まえひせきとおつよすれぞ
ゑ上の津行画よしこだ／＼

○上のや／＼お上様おの心省要とお詫びよえと
お不自由よおの言ひ性ひおのの／＼お詫びよえと
お詫びよ／＼一束よ費用とお厭ひお詫びよ／＼のよ
たよすお詫びよ津の上りよ／＼の心苦方
おもよお詫びよ／＼下よ三アトお家やけりふと
お手感へよ／＼おの騎樂と極り経用至るよ及び
又立あよが喜んでおれよ／＼お内に色の樹木
お枯枝のたゞ／＼お枯枝ともよづれゑりよ／＼

外枝のうちよりお盆の外にあれとお拂ひを義よ
まき。但一枝の枝とも本身より枝よりも
かうり抜きとくとくか枝のうちとあります
うちもえ隠すとくとも可有く義す。又枝の
木も差ふ有く根をゆる先より枝のうち
を枝のうちとくの枝のうちとく。枝のうち
を枝のうちとくす。枝あるとく枝はそれ
やあるとくかへゆくが枝あるとく。枝と
或ひあ。左出ちとのあたりつきらて枝の内と
枝の外とて内より枝の外とくが枝

左よりお拂ひとも極本とねりとくとくとく
手をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
はうけ年を枝のうちとくの枝のうちとくとくと
可仕義のとくとくとくとくとくとくとくとくとく
身をお愈すお拂ひ僕約よりとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

りそが敵ひのまへるよりは、先と悪あらず。不^レ候^レは竟勝するものたゞ一つ稅よに敵をもてて、ふにとやきのよびをもとめん。上の山敵とヤ^レ軍とも、多大の費用^ハ多くゆる。○大軍の爲^ハも生財^ハ大石生^ハ若元食^ハを寡焉^ハ者、雇用^ハ者舒^ハ則^ハ敗^ハ脛足矢^ハと^リめ^ハ財用と^リすのをよろこべ^ハ。ノ^ハ畢竟^ハ西^ハ結侯方^ハの出^ハあわ^ハそり^ハきも大軍のあくお車^ハはるかよ^ハ三^ハ方^ハ万石十^ハ方^ハ石^ハ、^ハ指^ハ方^ハ石^ハ拂^ハ處^ハうする。財用^ハかく限^ハ有^ハく義^ハある^ハ然^ハよ^ハ本^ハのひ事^ハ

さる^ハつ続^ハよちのう限^ハと^リ越^ハ居^ハよ^ハ限^ハと^リ越^ハえ^ハ下根え^ハ農工商^ハのと民^ハと^リ合^ハせり^ハも士^ハの數^ハも^リよ^ハと^リそれ^ハと^リ肺^ハ先祖^ハ代^ハの^リ接^ハお^リ並^ハト士^ハと^リ文^ハ古^ハ減^ハず^リと^リ起^ハ核^ハと^リ並^ハり^ハと^リも^リけ^リう^リと^リ出^ハ檢^ハ約^ハと^リ並^ハ起^ハ小^ハ義^ハ先^ハ勢^ハと^リも^リ不^レ但^レ一^ハ役^ハ八十人^ハより五^ハより三^ハより減^ハ一^ハ役^ハ制^度の三^ハと^リ次第^ハも^リす^リと^リ成^ハ義^ハと^リも^リ不^レ役^ハと^リ減^ハ一^ハ役^ハも^リ不^レの費用^ハと省^ハ紀^ハ歲^ハよ^ハ是^ハも^リ有^ハ來^ハ可^ハ少^ハの役^ハと^リ俄^ハ減^ハ一^ハ役^ハと^リ人情^ハ殊^ハの^リ不^レ本^ハとの役^ハよ^ハぬ^リを^リも^リふ^リと^リ易^ハく

不相成儀より是も上のものとてしかば
主はのれに多成並御とひて出先中一月を度儀
よせす。役人多くとくらむ者へ不承色もしく人情
極意よお成り根えにこまくけめのゆきとばも
有く義よりそ別役ともすと行。毎の筆墨
仕事としてのまことに候約通なり。先日出勤
仕事中と見取よ既に仕業ともすと筆墨空暇
トヤク義へああやる事ふお勤マリ義より申
出勤す。南とゆうやくすとヤハ五ノ月出勤仕業を
多くりよ減一ナツア出勤仕業とある。此日

減一ヤク少成より是もたゞ日々日勤へ隔處隔處
三番三番四番五番よお車ふすて士の身のよて
窓引の手をもつて年内タト直下給ふと
ひて出勤と家内の事。これとくがう今ま
ヤク少成より是もたゞ日々とヤク身の事。これ
がつをり。手に奉ふの入用ひは先て手帳もすくら
仕事と見取よ。す家内多きものと
仕事と見取よ。手帳もすくら。月代湯のみをもと仕
ひと内と場も仕下かえ月代湯のみをもと仕

リの費用も場所は日々多く御のすゝ産
タリとまじめに積りともまろのまよおふる處
もやうもんあるゆりて下へつてても莫窮
よおふらぬよつて誰にも不まふとは度るも
すつまゝおするたけの肉ふらぬのをう
がはまつて今日とお勤むつまづけ洁り
ああと取れよりからまくものよせをうの
お若方とまわらひとひりとひりとまわら
りの氣おや立川山下よりかひまくら
候く當あてアハヤの勅安をねよお車下

生しよつてはる自生と毛色の古義よつて下
頬のまゝよ定然とて古敷毛色の金娘の
山と棲らてもお世事や義よつて歴の清淨
簡易とまふとやうとてはすりともけあつて
仕合アリりてきみをるくよつてうつぬ
さよつて川下すよきをはりゆつよ
大勢ありて常くまつてはりて既用不
足の根えよりまつたててアリ根へあまえ
身あよ枝をまつて死りてゆゑよとまわら
さるまのよとおおのいこゑとれよう生一

合意よりす。

○植木とゆきの枝葉のうるまくへ葉ふらむ
みどりうす日陰の陰あくらうとくらむ
い城の勿海よきまへかへりゆうよかより
用ふとはとも根本のまひの石はりてくふま
のあらわすやねやくもやく臣民の枝葉あらわ
根本よのまへへ先根本の山徳とも要ふせん
ひつよれよぬする徳とまひのまひの文武
二ふとゆきのまきのうり外よ手こね拳拂志徳
仁義礼讓の徳なり起り築き敷朴を度心

のゆく武より生一ト毒ゆき元氣のまよよし
ねえ先候のぬいもの栗のうり始りい城ふらむ
男子のらめん賤むるお庭よき非邪ふのなむを毎
へりともやまとやまとやまとやまとやまと
うりうりうりたまのうして決断洗すけ方より限と
あたへせんやうりうり行ひを納得ほへり
不參もよよちよく萬のぬうれすりあす
小義よみゆく逐年承認候として先候の政と
开始の財を立めよ奥向の志まつと定め成りて
五十人隊の女中とも五人よお減り有とお勅

を如アノの如風ふとお五年石室へ十あつて
奥方移出側へ此石出でまくは兵主の御内を
古殿にて然もか女トシ家を色紅焼煙者と
頗生トト此者の義私事の力ともは度なる
也殿にてそれた内うそそ私教風よシニ
ヤ度トトもあ殿店技助へ戴キシヤキノノ第
頗の通を作付シヤ度を拂へお祭ナリナ月多援
ナリナモ之に拂アシヒと至る者之の氣より
自らの身立ヒテ内うち教風よシ度りものとよ
ルナキ通シタスをなれど我が妻ノ事多矣ハ

必日通ヘヘ兵主不アラ病より便益無トモ古許客
お缺省有候程よりきし厚ア後ハ望期よお教候程と
キシテ少しお出ナリトモ時トヤ變ハキテうれの義
キ通と経客ツコト一レタリトモ取扱中等とお考
ハキシカヘ頗のあすへお成まくノ子細ハウチの如
キモ十ち歳よお教客鳥もすくまくして其難ある
かう我あモタリトキリシムノア核のモ充
追ア承及ヒテモ止まぬ候約モも裏面事中モ
格列よき減リトモモ内美ノ事ノハ西風未和
キモ古舊多うともとモトナリ財人目通モる

致下さる事アリテヨウもあらぬもの也
オトコハ僕約のヤ後も立がまアたまちゆく早
カヘキアキアリテヤ村と云ひテナガ修業もと
ハシタニシタシテヤ上りてはきすへども
此義ハヤ後アリトテノ細川教人トヤハ女も
出要の役と勅不苟より私ア受け私義も不省
於ノル家のみ藏もともよめうるをヤ上りて
井上とももとをもんじての通義井洋寧也よひて
其右角ヘヤ後ハ然まく羽山お成ス合はきの色
ナ波ナラキ女の感もアするに要の事アリモ

師アお義アリ私とも改職の起援も立ア
遂熟仕ハ併是れの我より立ア(左)身上の
出立と云ふ左よりお城りてヘタヒテヒアリ
城
めやヨリキ多ナルシハシモヒ義ハ先此ふか如
度はヤ上り立アリハシモヒ通モ極ムトヒアリ
キ方ともなシの通過ア勿採改と至達もと
有之ハ我お義アシテシモヒ義アリ而テヒ義ア
アヤオチルお中一驚とお考ルモノトヤキヌ
ルは充々舟今朝ハ急度改トアハシキハ時
ナ波ハ殊ニ念アトアヤオツヘキル是那ア

はあつて、まことに外へ出で、それはずつと
まち方おれるやうなあ處すりへてゐるあると、千手
の御守の事す。よ其方どももまほりたより考
くとも此度の候おひ家中の市数すと始先
町へまぐの、本門を不復よならず行と
路の有りにしる候をさき夜ふたり起たる
こゝよりてけむり屋の象形要する事あらむと
縁入り跡の表ひゆうに有りてても我おぬと
うなづふとおもふくさる時へ先祖へ對へまう
天下浮世へ對へ、アワキもすまくそまの御守す

ひつて是佐の御より、かづくらる西本よ彌
経入るがんかんとみーる猿下渡りと作付へれ
まきを左の女郎おへ店出をうけり細工自身綿衣
がぬるおえもつけ、一茶ふは定が東の月の家中
半下の角よ皮お絵えと、お軽らやうふぞ
多作渡り候之れを考向、因よ絵えふあふくを
おねじりて、また東京後、の絵考みて、とくに
空氣のとくによ思ひ、お便り作付、お軽、上りんお枝
の若た孫え毛用お仕立りて、おねじりて、お

年來夷彼と焉用仕來ヤとモ上ふるの事居候
つふの上とを居る事少々ハ多々之の事ナリヘ
ちうの安乐とぞ、頗りへん下の人情とて坐候
左ナリモ乞給と乞候トは仕度なる事ふツキル
但一モ風候と云移トカラニ趣向人間の山煙
空座ウヘアシの義ハシラシヤクシキトヒノ
済キナリとモナリテう趣ハ居テ殊氣無用では
あうリ余經ナハ未アリアリタヤルトヒ移ト
移アキナリヤリテ近死ヤハモ序然モナリ
又ナリ作使わくナリお考ナキヌ外物の志を務えと

急ナシナリ至極也ヨリ我お綿衣と急ナリとモ
行徳の僕約ナモおもへんる事ナリモそれが
急ナリヤリモナリとモ僕約ト取リヤ
ヤリモトモ年々多幸モモトモ家中の者とモ
の處縁とも貸すけ無也銀雅と取リモナミ
何ナリモモトモナリ月を以て我お務えナル
急用ソリヤ胡夕の食はヌテモ減リヤモ下モ
とも銀雅と取リモナリナリモナリ
身かの天をナヤクとなんらナリナリナリナリ
ナリモナリナリナリナリナリナリナリナリ

風ふうよ絹細とうふぬき用取一々に必竟
表向糸えとアセシケルトドリヤテシハ根の
ものともん彼不取らとむすみナシ本根之
御ふ義も下トヨリ糸えとミーはウアリ
綿糸とミーは美義もお立ツアトム骨納戸
役ア付下トヨリ綿糸とミ用ヒコーリム
本筋ニモ人とのよハ家致つたの糸えとミ
此意用ヒキヤクヤヒトナハ極端もするヒキヤ
キスル但アオツサモロツキニ上糸えも
ハツ生ぬれ毛毛枝より仕度をなハトヤヒキヤ

ナハ右の店實らゆうよ福あくヒト白波仕合で
執政大臣より一統よ糸えがハ前用石仕合等
左僕の政行まわしも行きけるもよ上店への
実不實ハ育くハナリ色以無縫ハ色アリ根本
の立ルモナリ枝葉アヨギアリル

ナハ個案の左僕の政行枝葉アモ枝葉葉

ナハツ花実自然よつたるアリナリハ店合

聖芥下

花实、五個縫

○梅のあく梅けものひく元梅けある梅の花の候
りもとれ自然のそとく梅の木に梅けもあが
はうと梅けある梅けふといふをやうりへ造化
の巧とも出来さる義かく然とも花とて
も本とあくらゆり立てゝる義する也。こゑの
候とすともあ種は木の根本のあはく元木よ
き花なむいふともとをあくへ笑ひもさうも
久くもよとせん。十ひたかくも実ひハ内有
結ひヤハ根本のあくすく身本りてくとも
きつほくは元をもりうはやまくかもりも

さうとも經て元うすひまづとも八月九月
ちともすて実ひもあくすくもよ出度ハ仍く
植木となへ根木のまづひが事へすて身本
の葉が枝ひ元のほ山よつ充ひと嫁ひヤハ根と
る毛よつ身くらつともしと身多づかく身本の
毛をなと嫁ひや處すくもあく花をたまく等
くそつもつ葉の葉と愛一枝りゆゑ身本を
やくちふすく家ふの風氣の葉本の花のや
もあつたるみり実多く元サ一ぬきうする
園すへ元れもとす実も一見ひく根本の

勇徳よりあくまでも見る者莫大の心配より思ひの
恐よとおもひ下よとしむる風俗より実感する
事立ぬ一時あるる思ふよとおもひ下よとしむる
風俗多く實感する事立づゝの無表の風俗
の厚薄よりかくすと人あらとの風俗とを感
じたすととて出處の風俗と引立て源の文武
二忍ととてとくすりがれを主とせし行持からて
孝忠忠信仁義禮讓の風俗多くお車和車手から
貨車敷れ雑美巣籠の風俗多くお車和車手から
也城西安の富足の元風俗貧弱なると見、窮の

もとより空虚な

○人情のうりを重んずたるにとどく我と我の土の
文すとも重き秋もとくらうてほどの風俗と
みこまねするからてきくべからざつのまづきの風俗
の移りとくものよりゆくとやもととキサ作合の方の
店風俗のきのめよりゆくと大風のめく禁物の叶
木つまきう難難そしゆ一やゆきわゆく人間の出生
雑食の榮辱と云ひとおもひきとおもほ死風流
あるはねぬのまこと時へ下り自然とうちやがやう
笑といとやか文字がきくとくへとせせめくよ

お氣の武術をやうじても無意味流よあられず
漁窓か葬り入る死盡一ノ根えてもらはん候る
きの費用のおくるもと防ぐもあらずおもてす
細文武と車のぬ端のめいひくつも廢
くそく改行きなす小モ内と文へ達ちみまし
道理と無く小モ内と人の心からりんべん是
ゆきよりとくともうもやがひくねすす
その下へりとほよくたく有くらやもやらの
立派ひ次第として生とすすまよ武のと
うちの妙様の技と急りとよし手足となどと

技よもやう時と用よまやうわからん出で
上の字記次第によ用とよりとまえよ中以下に拘
うておぬくとへおぬくよまえとほあめ
あくへ身うよおのの端と致一非義の立身
出をとと頑ひるゝ技藝が等るゝ飲食衣被の
ねねもひらへま練はくと追徳へ自然とお仕
毛行の本とよりとまえとおねく筋文と武と
二をうち歩ることとて人の心儀のよづよざむ
たゞとまへの本經よけひるゝもん人情を
ももくねのこひかへる准つあるもと人情と

敗すと云ふとつすもきりてえまを靡のひより
生一トヤ成る事なるむ

第の毛洋食の所仕はと仕の内主の
急用仕事と袴とほりへ清風を送らてその方の
袴の向とよものと御身を送り月もくに鐘を
多く茶うどんを身をもとよりの水と氣を
換へ清風を送りへおきれま方へんる連たる
ものとせせゆへとくへとくへとくへとく
たゞよえやも方へきのものとくへとくへとく
はるる名をもとめのな是用はして清風を拂ふ

清風もおまへ上り生あつた死海よもやもよ
愛めのるを靡風流とあくと拂ふとくへとくへと
くへとく

○清風の風儀の清風の風儀よおやうよよよ
も比隣のやうよよよよよよよよよよよよよ
風儀とよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
あよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

地酒三升とヤサカの瓶中み切花が活け置きも
つ且へあらうおどりとも浦ての年候から種々
すまなはる海辺在候のりうち津城下遠江をも
歸令も行扁やアラれぬとあるお勅のちの又復古
よりも御主と生(甚)めよ參らて日比の易く仕
え徳する名主との宅より高はいを表慶風景
の脇元新とゆゑ直らて近隣の本所ももん
そり居風よりうけ立ても湯とまじひが草堂
アヤソシるやう行館よし田門うる本所ももん
が多引大切よりかわると或毛の月さんもとの

あるくらむ先手の内有りて我お梓の在るのをう
爲形様あらうあとお勅店りてそりとも店下と
洋食みす事すやうこのあらんをひく下わすら
まうすへお深う葉ふりて我およき用ひて
川底よとねうやうと伝くが底くよ着用ひて
ウチ津城付のとくむかう御もくらすす生是
そりもと下りて直すやうと嘸ークも
亭主の室内の者とせ集うらうと戴うを
りて像と流一やうやくねもくと社を法事よ
むまう先まるをくへ山の瓶の瓶を於秋月も本所

えとあると申すが、おれは紺布あり候。仕事
の所渡りて我へなりとあへて、まことに飛先
をよひ方役として有りて候。そしてナヌアヌの後代る
本縫と申るをかこ實の使用の仕事。次を序
記して候。はるかより古くは附下したが、我の
美角仕と同様の本縫。もとより川の品
取れあらう。もは羽タの所業をさうと
勿論もと申す。アヘの娘と嫁へ
致さをすと支度仕事と申すの内より緋細の致
よほと有り。今紙化しておおきを一ぱりと美拂を

悉く本縫えよとくらべ嫁へと致さるこの事と
モテ傳へ承り自然と百姓ともに感彼仕の元より
は僕約の本縫とおもひれよおふやく根ある本
よ花の付りて驚然のことをゆ

○某家の生れからよつて十年の内より本縫
業めらるゝの有りて七年一十年成る光景もかる
ある。有りて數百年がたをもつてあつてまだ本縫
あやうやくても候。のむとくの事。ふる家計にも久
あるものかよ。敢も一貫の功と申す。或く有利お
ね成り業と申つてはなり。みる程あの利と急

毛うすとせふ運びちもトシヒテも傳説の
歴もあゆるに辭ふ勅文ヤウシト全功と義なり
と來せ申ふ猶モ申一とア流すくそも大半
の全報とおりれ一旦よ賊用の融通とつけら
十年とへゐるをもくの石縄まゝ三度至りて一年
ちうの事もよ元氣充満の事め一旅の内に
も莫と極きりとくとくお役もて仕りて
人情へ安たより安一易をもつてものぢまも
苦一をより俄よ樂一と出立て始の若毛毛を
志きつりましもかむよ年毛もとふるが爲ふ

毛うすとせふ運びちもトシヒテも傳説の
歴もあゆるに辭ふ勅文ヤウシト全功と義なり
と來せ申ふ猶モ申一とア流すくそも大半
の全報とおりれ一旦よ賊用の融通とつけら
十年とへゐるをもくの石縄まゝ三度至りて一年
ちうの事もよ元氣充満の事め一旅の内に
も莫と極きりとくとくお役もて仕りて
人情へ安たより安一易をもつてものぢまも
苦一をより俄よ樂一と出立て始の若毛毛を
志きつりましもかむよ年毛もとふるが爲ふ

アヤルとアヤルを書くとアヤル日より取
扱もアヤルとアヤルとアヤルするの承あがく
御そんちやくおきねにヨムと云ひてあります
うう色々今日居室のた費用とお居室を申す
店舗アヤルとアヤルと又ゆるも又ゆるもと因す
おへんは地元を拵ひよりかります西庄の老舗志
牟ニハ多々アヤルとアヤルとアヤルとアヤルと
みと守り致と申す。

○おが家アヤルと極少と申す
おまえと仕りて二年と生一枝葉とつゝ年と

さうと申すとさうとゆくよおはの梅アヤルと
アヤル出来アヤルと實極仕りしんがつけ育ひ上
りとも財をすらぬり花を咲かずアヤルと秋本
の有るからうむねみ実極と仕りて次の秋本在
アヤリとも見るする梅樹たるアヤル家ふた
花僕もめ引くまき今日は減一ゆると減一減と
減て不足が足アヤル財用生アヤルと實極のアヤルと
仕りしりつまでも風儀を後よおおがねと申す孫
の汁となる貼りゆきふとおもろ心を根岸にて
枝葉花實アヤルと申すばかり編み見る殊の

めくはあらえお色義とす。人情の失る職ともく
他と形ひよものより、たて回廊等を施於多所故
而頗く文繡也と云ふも、筆アリを込まぬゆの
身すとも、身名とつせよ顯一るべからずの位も
禄美え甘はい、而も不ア義する況人命をもる
其固よりきる位も、身よがる居らうすてあよ此れ
アキテ起る事なく居す。又おほに上りてあ代とも
喫あとすたれすよりかよ志がくとをも、
義とまなべば、のむの仁徳の行をよ徳とくもの
すまむむに志の身と教わしにとす。一生かかて

仁と害をすとれまよとを作る、身と教一るを
も、教アハタク仁徳アシツキ。況今ヨリアリの
は若方と云ふをやくとも、身と教わるの義と
すまむむに行ふとも、は仁徳と云教アモ極云
とキナム。

古エテ余く僕約の取ル花束アシテ花束がた
交換清流アリツクアリは樂リシテ花束アシテ
アリ出度とキナム。

嚙鳴館遺草卷第一

11
11

醫學書

卷之十一

中藥考略

